

見る人間の目を内面に向かわせ、おのれと向き合わせさせるものだと、いうことを忘れてはならない。宗教は教育における役割において、なお多くのものを期待できるとも考えうるであろう。しかしまた、その教育はオーロピンドの思想によつて限定を受けているということも事実である。

日本の仏教各教団は明治維新以降、競つて学校を経営し始めた。その始めから国家の管理下におかれ、仏教の理念を生かし切れず、わずかに宗教の科目を設けることによつて他の学校から差別化するという安直な在り方をしてきた。僧侶養成に特化されない教育に携わる教団は、自らの在り方を今一度問い直すべきではないか。

中国仏教の唱導

宮井 里佳

一、東アジアにおいて伝統的な仏教教育は「法会」の場で行われてきた。インドの仏教において、出家者たちは布薩など定例の儀礼を行っていたが、在家の信者たちも八日・一日・一五日・二三日・二九日・三〇日の六齋日には集つて八齋戒を守っていた。このような齋会が中国においても行われ、次第に經典の講説を中心とした儀礼として整えられ、「法会」と呼ばれるようになった。東アジアにおいて一般庶民は法会を通して仏教の教えを聞き、体験したのである。

二、法会の中に「唱導」という説教形式がある(「唱導文学」(折口信夫)等の語や『元亨釈書』の「唱導は演説」という解釈に見られるように、「唱導」を広義にとらえる例も多く見られ

るが、ここでは小峯和明氏らの見解に従う)。梁の慧皎撰『高僧伝』に「唱導者、蓋以宣唱法理、開導衆心也」(『大正蔵』五〇、四一七C)とあるように、人々に仏法をわかりやすく説いて教え導くためのものである。

三、中国北朝末期の「唱導」の書に道紀撰(六世紀後半)の『金蔵論』がある(「宮井里佳・本井牧子編著『金蔵論 本文と研究』(臨川書店、二〇一一年二月)」。『金蔵論』は、因縁譚をテーマごとに収録した仏教の要文集であり、説法の種本として用いられた。唱導の書が因縁譚の集成であることは、前述の慧皎が「或雜序因縁、或傍引譬喩」(同前)と述べていることに合致する。『金蔵論』が説く因果応報とは、仏法を迫害すれば悪果が顕れ、仏法を護持すれば、すなわち塔寺・僧に益すれば、善果が顕れるということである。ここに説かれる善悪は世俗的な幸不幸と一致する。難しい教理は一切説かず、人々の興をひくような物語によつて、因果の道理(仏法)を説き、仏教を信ずる功德を説くものなのである。

四、『金蔵論』の写本・刊本は現在、日本、中国敦煌、韓国において発見されている。また、トルファンにも写本があった可能性があり、雲南の仏教書にも引用されている。つまり東アジアの広い地域にわたって流布したことがわかる。『金蔵論』に収録される説話は、中国において「唱導文学」「講唱文学」等と呼ばれる文献においてさまざまなヴァリエーションをとって現れる。また日本の『今昔物語集』など仏教文学にも散見され、その成立に影響を与えたことが知られている。以上のことから、『金蔵論』に見られる「唱導」が東アジアにおけるスタ

ンダードの一つであったことが推察される。

五、『金蔵論』に見られるような「唱導」を聞くとき、人々はそのような学びを得るのだろうか。善因善果・悪因悪果の物語は、人々を善なる行為へと導き、悪なる行為に躊躇いをもたらすだろうことが容易に推察できる。人々がくり返し因果応報の物語を聞いて善行への志向を高めることは、社会の安定にあって有益であろう。しかしながら、説かれる善果が美しい容貌や高貴で裕福な生まれであるといった世俗的な価値観や地位と結びつくことは、既存の社会の悪い意味での維持につながる。また、善悪が仏教を信ずるか否かの観点で説かれることは、「唱導」とは高尚な真理を教えるものではなく、仏教護持のためのものであったことを意味するであろう。ともあれ、かつて東アジアは「唱導」などの教育活動によって仏教文化圏となったのである。

日本の仏教教育

岩瀬真寿美

一 目的

仏教教育の立場から、わが国の仏教教育の人間形成的意義を考察する。インドの大乗仏教では、衆生が如来になるべき因として如来蔵を説くが、この概念は中国や日本では仏性という言葉で一般に知れ渡ってきた。如来蔵もしくは仏性があるからこそ、人は平等であると説明でき、他の人を尊重することや自己実現が論理的に可能となる。このように、仏教教育が現代の人間形成に有効であることを提示する。

二 宗教と教育

(一) 教育と教化の相違

方法としてまず、教育と教化の関係性を明らかにしておく。宗教は教育という語に馴染まず、教化するもの／教化されるものであると捉えられることが多いが、果たして教育と教化はどのように明瞭に区別可能なものだろうか。教育学・宗教教育学が専門の海谷則之と無の教育思想を研究テーマとする竹内明による考察を主に参照する。結論を先取りすれば、宗教と教育を完全にイコールで結ぶことはできないものの、宗教も教育と馴染むところがある。

(二) 仏教と教育の共通性と道徳教育の限界

それが法律に見てとれるのが、わが国の教育基本法の中の教育の目的である。にもかかわらず、宗教と教育の関係性に多大な影響を持つ政教分離政策がある。一方で、わが国の政教分離政策と調和する形でかつ宗教を教育に導入したいとする試みから現れてきた議論が、宗教的情操教育をテーマとするものである。

(三) 仏教的「恭敬」とキリスト教的「畏敬」の相違

宗教的情操教育としてまず議論されるテーマは、いわゆる「いのちの教育」である。さらに、文部科学省が提示する「学習指導要領道徳編」において畏敬の念という表現が用いられているように、畏敬の念はあらゆる宗教に普遍的な概念であるとい国は捉えている。しかしながら、ここで参照したいのは、海谷による恭敬と畏敬の相違についての考察である。仏教では畏敬の念ということを書かない。仏教では怖れを説かず、むしろ覚